〔太平記二〕南都北嶺行幸事

彼堂（大講堂）ト申ハ、深草天皇ノ御願、大日遍照ノ尊像也、中比造營ノ後、未ダ供養ヲ遂ズシテ、星霜已ニ積リケレバ、甍破テハ霧不斷ノ香ヲ燒、扉落テハ月常住ノ燈ヲ挑グ、サレバ滿山歎テ年ヲ經ル處ニ、忽ニ修造ノ大功ヲ遂ラレ、速ニ供養ノ儀式ヲ調ヘ給ビシカバ、一山眉ヲ開キ、九院首ヲ傾ケリ、

〔鹽尻五十五〕又曰、長崎の婦人、男のごとし、眉毛を生して常とす、年老たる女の額をかし、平戸なんども同じさまなりしが、近年國の守より令して、領内の女眉を刺侍る迚、珍らかなる樣にいへるとて物語せし、平家物語にや、鬼界が島の事をいへるとて、男は立ゑぼしもきず、女は髪をもさげずといへり、そのかみは、是を片田舍の俗として、にげなく思ひけるなるべし、今の人は、大家といへども元服の姿なく侍る、賢按、元服のすがたとは烏帽をかむる事なり、凡女はいつも眉を拔侍るに、西のはづれには、いまだかゝる事侍るにや、但し異邦の人をかしかれば、眉を生じ侍るかゑりがたしとて笑ひ侍りし、

〔鹽尻九〕一柳川邊の婦女は、老に至る迄、眉毛をとさずとなん、賢按、九州長崎天草邊も同じ、

〔倭訓栞前編末二十九〕まゆひき　日本紀に美女之睩と見えたり、万葉集に眉引と書り、又まとびきとも見えたり、

〔日本書紀八仲哀〕八年九月己卯、詔群臣以議討熊襲、時有神託皇后而誨曰、天皇何憂熊襲之不服、是膏之空國也、豈足擧兵伐乎、愈茲國而有寶國、譬如美女之睩有向津國、（略）（下）

〔萬葉集十二古今相聞往來歌〕正述心緒

吾妹子之、咲眉引面影、懸而本名、所念可毛、

〔倭訓栞前編末二十九〕まゆねかく　人に戀らるれば眉根痒しといへり、遊仙窟に人眼皮瞤則見好